

2005年7月17日 聖霊降臨節第10主日礼拝

『守るべきこと』

(申命記 18 章 15 節、使徒言行録 16 章 1~5 節)

パウロとバルナバは別々に伝道を開始しました。バルナバは、マルコを伴いキプロス島へ船出しました。一方、パウロはシラスを伴い陸路を通して、シリア州とキリキア州に伝道に向かいます。これらの地域は、既に第一伝道旅行の時に福音が宣べ伝えられ教会が建てられた所です。

そして、パウロはテルベとリストラにも行きました。パウロたちが以前にリストラに主の言葉を伝えた時のことです(使徒 14 章 8~20)。そこに生まれつき足が不自由な人がいてパウロの話聞いていました。パウロは、その人に自分の足で立つように言いました。するとその人は躍り上がって歩き出したのです。それを見ていた町の人々は、パウロたちを神々のように思いいけにえをささげようとしたのです。パウロは、群衆の中に飛びこみ言いました。自分たちは皆と同じ人間に過ぎません。天と地を創造された真の神がおられます。その神が今も規則正しく季節をめぐらせ、必要な時に雨を与えてこの世界を保っておられます。人間や人間の手で造った偶像を離れて、真の神を信じるようにと町の人々に告げました。人々は、パウロたちにいけにえをささげることを止めました。ところが今度は他の町からパウロたちに反対する人たちがやって来ました。その人たちに扇動された町の人々がパウロに石を投げて打ち殺そうとしたのです。このような騒動の為に、やむなくパウロたちは別の町に行きました。同じような理由で、パウロたちはある町から別の町に逃れて行くこともしばしばありました。しかし、強力な反対にあいながらも、パウロたちは福音を語り続けました。そうして多くの人がいエス・キリストを信じて主の弟子となったのです。

その弟子たちの中に、テモテという弟子がおりました。パウロによって書かれたテモテへの手紙でもよく知られています。使徒言行録では、初めてテモテの名が出てきました。テモテという名は、神を讃える人という意味です。テモテは、パウロの重要な同労者としてよく手紙の中に登場しています。テモテの母は、エウニケという人で祖母の名はロイスとって二人ともクリスチャンでした(テモテ二 1 章 5)。テモテの母がユダヤ人クリスチャンでテモテの父はギリシャ人でおそらく信者ではなかったと思われます。この母と祖母に宿った信仰がテモテにも宿っていたのです。

パウロは、伝道の同行者として、このテモテをぜひつれて行きたいと考えました。そこで、伝道に同行させる為にパウロはこのテモテに、割礼を施しました。その地方に住むユダヤ人の手前だと言うことです。どうしてあのパウロが、テモテに割礼を受けさせたのか。このことを、わたしたちには、奇妙に感じます。ついこの間教会の中で割礼のことが問題になりました。ある人たちがユダヤからアンティオキアの教会に来て、異邦人が救われる為には割礼を受ける必要があると教会の中で言い始めたのです。その為に、教会全体が揺れ

動きました。異邦人が救われる為には、果たして割礼が必要かどうかそのことを協議するために教会最初の会議がエルサレムであったばかりです。異邦人の割礼に賛成する人たちと、パウロたちそしてエルサレムの使徒や長老たちで話し合いが行なわれました。エルサレム会議では異邦人のクリスチャンには割礼は必要ない。人が救われる為には、イエス・キリストを信じて洗礼を受けるだけで十分だと確認したばかりです。それなのに何故。そこには、幾つかの理由が考えられます。その地方にいるユダヤ人たちの手前彼に割礼を受けさせたといいます。その地方のユダヤ人たちは、テモテの母がユダヤ人であることも父がギリシャ人であることも知っていました。ユダヤ人の女性が異邦人と結婚するということ事態ユダヤの人たちは、良くないことだと考えていました。現代では、国際結婚はそんなに珍しいことではありません。それでも、文化や習慣の違いなどで摩擦が起こることもあります。まして、二千年前のユダヤ人達にとっては尚更でした。ユダヤの人たちにとって、異邦人との結婚は不法なものと思われていなかったのです。それは、異邦人との結婚から偶像礼拝が入るという危険があったからです。異邦人との結婚で生まれた子供は、神の民から除外されるとさえ考えられていたのです。ですから、周囲のユダヤ人の中には、テモテをあの子は異教徒の息子ではないか。異邦人を父として生まれたテモテなど神の民でないと思っている人たちも少なくなかったことでしょう。それに加えて異邦人であった父が、テモテの割礼に反対していたということもあり得ます。しかし、パウロは、このような考えには、反対でした。キリストにあっては、ユダヤ人もギリシャ人もない。片親がクリスチャンか未信者どうかも関係ない。クリスチャンが信者でない人と結婚することに反対もしていません「信者でない夫は、信者である妻のゆえに聖なる者とされ、信者でない妻は、信者である夫のゆえに聖なる者とされているからです。そうでなければ、あなたがたの子供は汚れていることになりませんが、実際には聖なる者です」(コリント一 7 章 14)。ユダヤ人であろうとギリシャ人であろうと、わたしたちはイエス・キリストのと尊い血によって、罪から清められたのです。キリストが、わたしたちの為に血を流してくださらなかったら、わたしたちは誰一人清くなることはできません。そのために、天の父は大切な独り子を与えてくださったのです。人を聖なる者、神の民とするのは神の業なのです。そこには、何の差別もありません。たとえテモテが、異邦人の未信者を父として生まれたとしても。テモテは、間違いなく神の民の子供として生まれたとパウロは言いたかったのです。だから、このテモテを神の民の中で生まれた子供として認められるべきである。この割礼を通してパウロはそれを示したかったのです。テトスを同行する時には、パウロは彼に割礼を受けさせてはいません。割礼を受けさせるにしても、割礼は受けさせないとしても、いずれにしても人が救われるために、必要なのはイエス・キリストの恵みであるとパウロは考えていました。大切なのは、イエス・キリストに結ばれて生きるということです。このことを大切に思ってパウロたちは宣教の道のりを進みました。

パウロたちは、テモテを伴って町から町に巡り歩いて福音を宣べ伝えました。そうして、エルサレムの使徒たちと長老たちの決めた規定、つまりあのエルサレム会議でを守る

ようにと決められたことだけを守るようにと伝えました。エルサレム会議で確認されたことは、どのような人もイエス・キリストの恵みによってのみ救われるということ。だから救われる為にはキリストを信じて洗礼を受けるだけで十分であるということ。そして、キリストを信じる者として守るべき事を守ること。つまり偶像にささげられたものと、血と絞め殺した動物の肉と、みだらな行いを避けるようにと。クリスチャンとして、偶像礼拝を避け、人の血を流さず、動物をむやみに殺すことも止め、みだらな行ない汚れた行いをさける。それは、今もわたしたちがキリストのものとして生きるために守るべきことです。

「正しくない者が、神の国を受け継げないことを、知らないのですか。…みだらな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色をする者、泥棒、強欲な者、酒におぼれる者、人を悪く言う者、人の物を奪う者は、決して神の国を受け継ぐことができません」(コリント一 6 章 9)。とパウロも手紙に書いている通りです。エルサレム会議で確認したことも、パウロが手紙に書いていること、どちらも十戒の言葉に一致しています。十戒は、キリストに清められたものとして、生きるためのもの。神の国で生きるために守るべきルールです。わたしたちは、守るべきものを守って、神の国を受け継ぐことが出来るのです。わたしたちには、罪人故に弱さもあるし欠けもあります。神のルールを完全に守れるという人は一人もいません。生きている内に完全になれる人はありません。しかし、神のルールに従って生きることを今この地上に生きていく内に真剣にはじめていくということが大切です。神様の前では、どんなに信仰の年数の長い人であっても初心者に過ぎません。けれども、主のみこころに生きることに全力を傾けて生きたいと思えます。

初代教会の異邦人の信徒たちも、割礼を免除されて良かったということだけで単純に喜んだだけではなかったのです。今まで本当の神を知らずに自分自身のことだけ思って生きて来た。そのような、古い罪にまみれた生き方を、神様によって変えて頂きたいと真剣に祈り願っていたのです。神様から与えられたルールは、わたしたちが神様からの祝福から離れて行かないための大切な道しるべです。神から与えられた守るべきルールを守るといふことを、教会は真剣に受けとめて行きました。こうして教会は、神の言葉をまもることによって信仰を強められて行ったのです。そして日ごとに人数をも増し加えられて行きました。

わたしたちも、この初代教会の姿を見習いたいと思えます。神の民として相応しくなれるように。神によって与えられた守るべきルールを守るように。神の御言葉と聖霊の導きに従って行きましょう。そうすれば、神がこの教会を強め、わたしたちの歩みを祝福してください。主イエス・キリストの恵みが皆さん方と共にありますように。

[説教者：堀地敦子牧師]